

第一次入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2021. 1. 8

「問題一」次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「自分の価値感を大切にしたい」という思いは、今の若い人にはとりわけ強い。「自分なり」という言葉もよく使われる。

「とりあえずアタシ的にはオッケー」という言い方が流行った。これは、「公的」に対立する「わたくしの」いうよりは、「自分なりの価値感では」ということだ。裏側にA ダイシヨウ的な公的なものがあるわけではない。

「自分なりの価値感だから、正しいとか間違っているとかいう問題じゃないでしょ」という逃げ道がつねに用意されている。論理的に他者とやりとりする可能性は、あらかじめ注意深く避けられている。

「わたしって、……な人だから」という言い方も同様だ。「わたしって、……な人だから」には、「わたしって……じゃないですか」と同じで、強要してくる **1** 神経さがある。「私とつきあうなら、私がそういう性質をもっているんだってことくらい前もってわかっておいてもらわないと困る」とでも言われている気持ちになる。「私を不機嫌にしないように、私の価値感や嗜好をわかっていて」といった「自己の殿様化」が感じられる。

自分に対して「……な人」という、一見客観的に自分を見る能力があるかのように思わせながら、その実、まったく自己中心性をまる出しにしているだけである。客観的に尊重されるべき人物として自分を位置づけるけれども、たいていその内容は、あらためてとりあげるだけの価値や重要性があるほどのものではない。

こうした自己中心性を支えているのが、「価値感」という表記だ。正確には、「価値観」だ。しかし、現在は、この誤用がまかりとおつて、十代の多数は「価値感」と書く。「感じる」ということを価値評価の基準にすると言えば聞こえはいいが、思考しないということでもある。

①「価値感」の違いは趣味の違いに過ぎなくなる。他者との対話のなかで価値観を問い直されるといった機会は、そもそも求められない。

対話がクリエイティブになりにくい原因は、ひとりひとりがクリエイティブに面白い見方ができずに同質的であることももちろんあるが、客観的な理解能力の低さに B キーンしている部分も大きい。理解能力の低さは、客観性(間主観性)への信頼

が薄いことからきている。

② 必要な誤解から、筋違いの議論になっていって、「わかりあえない」「価値感がうから」といった短絡的な脆弱な結論に逃げる。その裏には、「人と人が完全に理解し合えるなんてできっこない」という生産的ではない相対化がある。

「自分なりの価値感」は、カプセルのように自己を保護してくれる。ウォークマンも携帯電話も、カプセルになる。

ウォークマンが登場したときには、多くの人が違和感を感じた。それは、公の場にプライベートな空間が持ち込まれた違和感であった。それまでの価値観からすれば、他人の目の前で自らの快適な世界にひとり閉じこもるのは、文字通り「傍若無人」な振る舞いであり、避けられるべき態度であった。人に対して閉じている態度をああもはつきり示されれば、たとえ他人同士であろうといい気はしない。

しかし、その「② 傍若無人の構え」を前提として求め、C ジョチヨウする快樂の道具は、一気に世界中に広まった。「ii 袖ふれあうも多生の縁」という人間関係の考え方など、ここではまったく重視されない。あまりにも効率的な「他人に対して閉じた道具」であった。

スポーツなどの若いヒーローたちが、移動の際にファンや報道陣の前をウォークマンをつけて通り過ぎていくシーンはお馴染みだ。それが、「自分を大事にするクールなD カッコウよい態度」とされる。

しかし、期待している人に、「省エネ」的な態度を見せられると、その人間のスケール(器)が小さく感じられて、がっかりする。子どもがエネルギーを惜しみなく放出するように、おしげなく振る舞うことが祝祭的な気分をひき起こすのだ。人から見られていることを受け止めて人に見せる。「気」を受け止めて倍にして返していく。ほほえんだり、E 会釈するだけでもいい。コミュニケーションと「気」は、そのたびに増幅していく。冷えて閉じた身体は、こうした増幅を起こしにくい。

「ムカツク」というのは、プライベート(私的)な領域を侵害されたときに、とくに起こる反応だ。自分とはあまり関係がないのに憤慨する、いわゆる義憤の感覚は、ムカツクにはない。ムカツクがしじゅう使われているということは、私的な世界が、ここを大きくしめてしまうようになっていくことだ。

プライベートな快適空間をどれだけキープできるか。これが、時代をおおう大きな傾向である。電車の中にいるときも自

室にいるときのよう過ぎたい。自分の部屋で好きな音楽を聴いたり、気こころの知れた仲間と電話で話したり、テレビゲームをしているときの快適さを、つねにキープするために、ウォークマンや携帯電話やポケットゲーム機器は強力な道具になる。

つるみ、群れて、異質なものはムカツクと排除しがちな背景には、「一人になる」のをことさら恐れる傾向がある。一人でいることによる充実感を学ぶべき時期というものがある。充実した一人の時間は、緊張感をもった友情関係とセットになっていることも多い。

一人きりになることに必要以上の恐怖感を持つので、絶えず誰かと携帯電話などでつながっていたくなる。「友だちは何人いるか」という質問を若い人にしたアンケート調査があった。その中に、友達の数が三〇〇人と答えるティーンエイジャーの女の子がいた。この数字は、彼女の携帯電話の最大メモリーだった。③これは、象徴的な答えではある。

好きな友だちとは、いつも話していたい。そうでない人とつき合わなければならぬのは、うっとうしい。これが通用するようになってきた。

子どもが好き嫌いに関わりなくつき合わなければならぬ異年齢の人間の絶対数は、大幅に減った。これには、兄弟姉妹の数が少なくなったこと、核家族が進んで祖父母と暮らす機会が減ったこと、味噌や酒を借り合うような隣近所のつき合いが希薄になったことなど、さまざまな社会背景がある。

改めて言うまでもないことだが、兄弟姉妹という関係のあり方は、対人関係能力を鍛える。同じ兄弟姉妹でも、「兄弟姉妹でなければあまり話もしてないだろうな」と思うほど趣味も価値観もちがうことは、よくある。友だち以上に、不思議な縁でつき合うことになっている。そうした人間同士が、いざこざもふくめて、もみ合いながら成長することで、人間関係能力はひじょうに鍛えられる。

だれでも実感があることだが、性格形成の要因の中で、兄弟姉妹構成は、抜きがたい役割を果たしている。第一子と親との関係の仕方と、それ以降の子どもとは事情が相当異なる。たとえば、今は聞くことも少なくなったが、「末っ子は三文値が安い」ということわざがある。我慢したり下を世話する経験が少なく、かわいがられるばかりで世間知らずでわがままなと

ころがあるというような意味だ。

土居健郎が『「甘え」の構造』で言うとおり、日本社会には、うまく「甘える」ことができるかどうかが重要な意義を持つ特殊^{しゆせ}性がある。総じて、第一子は、うまく「甘え」の技^{わざ}をつかえずに損をすることが多く、末っ子は、「甘え」を人間関係上の武器としてうまく使いこなすことが多いと言われる。私は末っ子なので経験があるが、末っ子同士が出会うと、互い^{たが}の「甘えの技」が透^すけ合^あつて見えてしまう。

同学年の子どもでも、上に兄や姉、特に同性の兄・姉がいるかどうかで成長の条件は変わってくる。お姉さんが親との戦いの歴史の中でようやく勝ち取^とつてきた門限^{もんげん}の延長^{えんちやう}の権利^{けんり}を、妹は労^{らう}せずして手にいれる。テレビゲームの購^こ入^{にゅう}を親が反対している場合、第一子は、ねばりづよい交^{こう}渉^{しゃう}を続けてようやくそれを手にいれるわけだが、第二子は、それをやる必要はない。幼稚園^{ようちえん}には、第一子とそれ以外をクラス分けするところもある。

兄弟姉妹の数の減少は、次の世代になると、おじさん、おばさん、いとこの減少としてダメージを倍加させる。親との関係がしつくりこなくても、おじさんやおばさんと相^あ性^{せい}がいい場合があつて救いの場になることがある。兄弟姉妹の数が多い場合には、おじさんやおばさんの中に相当世の中の基準からはずれた人もいて、そういう人から、親からとは違^{ちが}う知^ち恵^えを得ることもある。

親がたてまえを通すタテの関係とするなら、おじさん、おばさんは、ナナメの関係である。責任や期待が親よりはうすいので、気楽につき合うことができる。

指摘^{しで}されることは比較^{ひかく}的^{てき}の少^{すく}ないが、幼^{よう}少^{しやう}期^き、思^し春^{しゆん}期^きなどを通じて、「いとこ」の存在^{そんざい}は、意外に大きな教育力、影^{えい}響^{きやう}力^{りよく}をもっている。いい影^{えい}響^{きやう}かどうかはわからないが、私の経験では、私が浪^{ろう}人^{にん}して上京したために、その後親しいとこが皆浪^{みな}人^{にん}して同じ予備校に行つてしまったということがある。

兄弟姉妹ほど日ごとろぶつかり合うこともないので、素直^{すなお}に話^わし、耳^{みみ}を傾^{かたむ}けることができる。いとこが何人もいる場合は、その中のだれかを基準とすることができる。あのいとこが入った高校へ行きたいというように自然に指^し針^{しん}が見えることはあつても、兄弟姉妹と違^{ちが}つて直接比べられるプレッシャーは少ない。

いとこの兄さんや姉さんは、「ナナメの関係性」のもつとも、テンケイ的な形である。すくない子ども数で丁寧に育てるという時代に入ったことは、社会の成熟の一種の必然でもあるし、必ずしも否定的に見る必要はないが、こうした④「ナナメの関係性」の大きな教育力を別の形で補う視点はもつべきであろう。

(斎藤孝『子どもたちはなぜキレるのか』より)

(二) 〓 線部A「タイショウ」、B「キイン」、C「ジヨチョウ」、D「カツコウ」、F「テンケイ」を漢字に改めなさい。

(二) 〓 線部E「会積」とありますが、これと「会」の読み方が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会場 イ 会合 ウ 会得 エ 会長

(三) 〓 1、2 に入れるのに最も適当な漢字を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし同じ記号を繰り返して用いてはいけません。

ア 非 イ 不 ウ 未 エ 無

(四) 〓 線部 i「られる」、iii「ような」と同じ意味・用法のものをそれぞれ後から一つ選び、記号で答えなさい。

i「られる」

iii「ような」

ア 故郷こきょうの母のことが、案じあやられる。
イ 先生が、教室に入いって来こられる。
ウ それなら、ぼくにも考かんえられる。
エ 通学とがくの途とち中で、犬いぬにはええられる。

ア その子は、天使てんしのようようなかわいらしさだだった。
イ 君も、これからは少すくしまじめに勉強べんきやうしような。
ウ うれしくて仕方しほうがない、ようような笑顔えがおを浮うかべる。
エ ぼくは、カレーカレーのようような辛からい食くべ物ものが好すきだ。

(五) 線部Ⅱ「袖そでふれあうも多生たしやうの縁えん」の意味として最も適当てきとうなものを次の中から一つ選えらび、記号で答こたえなさい。

- ア 袖そでがふれあうようようなささいなできできごとごとも、これから起おきる大おきなできできごとごとの前まへぶれになることこともあるといいうこと。
- イ 袖そでがふれあうようような不愉快ふゆかいなできできごとごとも、人ひとと知しり合あうきつかけとして生なかすようようにしなしなければなららないといいうこと。
- ウ 袖そでがふれあうようようなちよつとしたできできごとごとも、決けつして偶然ぐぜんではななく、何なにか深ふかい縁えんがああつて起おこるものもののだといいうこと。
- エ 袖そでがふれあうようようなつまらなないできできごとごとも、実じつは多おほくくの人ひとと縁えんを結むすぶことことの大おほ切きさを表あらわしているものもののだといいうこと。

(六) — 線部① 『価値感』の違ちがいは趣味しゆみの違ちがいに過ぎなくなる」とはどのようなことを言っているのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「価値感」は、自分自身の好みを表す感覚的なものでしかなく、それが人によって違っているのは当たり前なのだから、互いに尊重しなければならないということ。

イ 「価値感」は、自分がどう感じるかということではしかたないため、それが他人と違っていてもまったく問題にはならず、自分のものの考え方にも影響しないということ。

ウ 「価値感」は、「感じる」ということを価値評価の基準にしているため、それにとらわれすぎると「考える」ことの重要性がわからなくなってしまうということ。

エ 「価値感」は、自分が趣味とする世界の中だけで通用するものであるため、他人に理解されなくても、自分の趣味を楽しむのには何の影響もないということ。

(七) — 線部② 「傍若無人の構え」とはどのような態度のことですか。それを説明した次の文の にあてはまる二十四字の表現を本文中から探さがし、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。ただし句読点も字数ぶくに含めます。以下の問題も同様です。

ことによって、周囲の人を完全に無視する態度。

(八) — 線部③ 「これは、象徴しょうちゆう的な答えではある」とはどのようなことを言っているのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友だちだと答えた数と携帯電話の最大メモリー数が同じということは、その女の子が抱く一人きりになることへの恐怖心の強さと、それを紛らすために電話をかけられるのが友だちだという考え方を表しているということ。

イ 友だちだと答えた数と携帯電話の最大メモリー数が同じということは、携帯電話のような機械を使わなければ友だちとしての関係を保つことができない今時の若者のあり方を表しているということ。

ウ 友だちだと答えた数と携帯電話の最大メモリー数が同じということは、電話がかけられる候補を増やして、一人きりになる恐怖心を抱かないようにしようという、その女の子の懸命な努力を表しているということ。

エ 友だちだと答えた数と携帯電話の最大メモリー数が同じということは、機械の性能に支配されて、たいせつな友だちの数さえも制限しなければならなくなった現代の若者の悲劇を表しているということ。

(九) —— 線部④ 『ナナメの関係性』の大きな教育力」を次のように説明しました。

字数でそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

□ に当てはまる表現を、指定の

「ナナメの関係」である「おじさん、おばさん」は □ 1 (二十五字) □ ができ、「いとこ」は □ 2 (十七字) □
がないうえに □ 3 (十三字) □ も少ないので、素直に話すことや、意見に耳を傾けることができませんので、それによって
思いがけない知恵を得ることや、生き方の指針が見えることもあるということ。

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「僕（吉谷純一）」は、中学三年生の一学期、桜のようなイメージを持つカナハギさん（金萩恵理香）と出会った。彼女はクラスの中で幅を利かせている三浦のグループに属しており、無口で小心そうな「僕」は、そのグループの「パシリ」にされてしまっていた。その後、「僕」と同じ高校へ進学したカナハギさんは渋谷でスカウトされ、アイドルとしての活動を始めるのだが、「僕」を「パシリ」にしてこき使っていた過去を隠そうと考え、「僕」に口止めする。交換条件として、「僕」は空き地の瓦礫のなかにある桜を毎年見に来てくれるよう頼んだ。それは、「僕」が小学生のころに見つけて心を奪われ、カナハギさんと重ね合わせながらずっと見てきた思い出の桜だった。

花は今年も美しく咲いた。頭上に伸びる枝の先には、もう手が届きづらくなっている。去年、カナハギさんが花の蕊をいじっていたことを考えると、すごい成長だった。純粋に嬉しい。僕は咲いた花を見上げながら、自然に顔をほころばせていた。風が暖かい。この花の下でカナハギさんに会えると思うと、すごく幸福な気分だ。

君はきれいだ、カナハギさん。いつも堂々として見える。*嫉妬深い女子の言うことなんてそのまま気にしないでいればいい。あいつらは君の価値がわからない愚かなものだ。

彼女へ差し出す言葉を考えながら、僕は膝を抱えて少しうとうととした。花が五分咲きの夕方だった。

気が付くと、目の前に白い太腿があった。夢かな、と思っただけで、顔を上げると、確かにカナハギさんが立っていた。ミニスカート姿で、正面から僕を見下ろしている。①後ろには焼けるような夕焼け空があった。

「……あ。来てくれたんだ」

目をこすりながら言った。逆光で、彼女の表情はよくわからない。

「忙しいのに、ありがとう。嬉し——」

立ち上がって尻を払ったところで、カナハギさんがこちらに手を伸ばした。僕の頭を抱くかのように、右手を顔の横に差し向ける。

思わず息を呑んだ。しかし次の瞬間、僕の頭の後方で、何か有機的なものが裂ける、めりつという音がした。

「むかつく……」

振り返ると、彼女の手が桜の枝にかけられていた。下にあるほうでは比較的細い枝が、根元から折られている。

やめて、と叫ぼうとしたけれども、「ふっ」という小さなかけ声とともに、枝が完全に折り取られるほうが先だった。

彼女は大きく手を振り上げた。反射的に腕で身をかばうと、桜の枝でAしたたかに打ちつけられた。

「なに、いい顔しちゃってるの。あんただって、あたしでいやらしい妄想してるくせに！」

避けようとしてかんだけれど、遅かった。枝で打たれた腕の外側が、B□□□□と痛む。僕はその場へたり込んで彼女を見上げた。

枝を持ったカナハギさんが僕の前にしゃがむ。それで初めて表情がわかった。彼女は、夕aと同じような真っ赤な顔をして、唇を噛んでいた。目も眉も、C□□□□と音がしそうなほどつり上がっている。

「よくのうのうと『ありがとう』とか言えるよな。頭おかしんじゃないやねーの？」

もう一打。今度はもろに頭に入った。ばしゃつ、と音がして、目の前に花びらが散った。

「ふざけんよ。どいつもこいつも、Dひとこのこと食い物にしゃがって……」

Dうわごこのようにカナハギさんがつぶやく。

—— ああ、全然大丈夫じゃなかったんだ。

僕は、自分が③カナハギさんを——カナハギさんの精神を——過大評価していたことを知った。いくら平気な顔で学校に来るからといって、彼女がこの特殊な状況に耐えられているわけではなかったのだ。学校のいじめも、水着やメイド服の仕事も。その職場でどんなつらいことがあるのか、僕には知る術がない。あまり考えたこともなかった。けれども、撮影会のぎこちない笑顔を思い出すと、ほんの少しはわかる気がする。

「もうこっちは見んな！ 写真も見んな！」

桜の枝での殴打は勢いを増していった。自分の身体に、無数の引っかけ傷ができてるのがわかる。明日にはみみずばれに

なるだろう。

「むかつく。ほんとみんなむかつく……」

枝が裸になつてしまふと、カナハギさんはようやく腕を下ろした。枝も、その辺に転がしてしまう。頭を上げると、僕の周りを取り囲むように、花の残骸が散っていた。

カナハギさんは、肩を上下させて息を整えていた。その息の音だけが、しばらく聞こえていた。僕はさっきまで考えていた言葉をすべて失っていた。

花のおいが強くたちこめる。暮れかけた陽が、彼女の髪の毛のふちを金色に染めた。少し頬を上気させたカナハギさんは、険しい顔をしたままで、それでも美しかった。清潔感に満ちたまつげ。息の漏れる唇の紅色。にぎりしめたこぶしの、小さく飛び出た骨の頭。

彼女をきれいだと思うことが罪ならば、僕は確かに一級の罪人だ。

「ごめんなさ〜」

用意した言葉の代わりに、口をついて出たのはそれだった。

「ごめんなさ〜……」

すぐ前で、彼女が立ち上がるのがわかった。

「もう来なくていいよね？」

顔を上げてうなずきを返すと、カナハギさんは折った枝の切り口をそつと撫でてから立ち去った。

桜は切られると傷口から腐ってしまうことが多いのだという。「桜切るバカ、梅切らぬバカ」という言葉があるのを、あの一件のあとに園芸辞典で「桜」の項目をひいて知った。剪定さえも最小限にしなければいけないらしい。僕は慌てて、ナントカ促進剤という、傷口がふさがりやすくなる薬をホームセンターで探し、桜を手当てした。

その甲斐あつてか、桜は元気だった。真夏には、葉がへんなりとしおれることがあつて心配したけれど、夕立があれば次の日にはあおあおとしていた。

*嫉妬深い女子 || 芸能活動を始めたカナハギさんは、同じクラスの女子たちからいじめの標的にされていた。

(二) || 線部A「したたかに」、D「うわごとのように」のここでの意味として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「したたかに」

ア あちこちをすきまなく

イ しつこく

ウ 相手よりも一枚上いちまいうえをいくように

エ とても強く

D 「うわごとのように」

ア 化け物にとりつかれたように

イ 悪い夢を見ているかのように

ウ 同じことを何度もくり返して

エ 特にだれに対してということもなく

(二) || 線部B、Cの「□り□り」は、「わんわん」のように繰り返す音を含む単語です。それぞれの□にあてはまるひらがなの組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア : 〈B も

C か〉

イ : 〈B ひ

C き〉

ウ : 〈B み

C め〉

エ : 〈B じ

C ち〉

(三) 本文中の a に入れるのに最も適当な漢字一字を本文中から探し、抜き出して答えなさい。

(四) — 線部①「後ろには焼けるような夕焼け空があった」とは、どのようなことを表していますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」がカナハギさんをいじめから守ってあげたいと強く思っていること。

イ 「僕」の言いなりになって服従させられていることに怒っていること。

ウ カナハギさんが、自分を取り巻く環境の変化にいらだちを感じていること。

エ カナハギさんに寄せる「僕」の思いがおさえきれないほどだということ。

(五) — 線部②「ひとのこと食い物にしやがって……」からうかがえるカナハギさんの状況として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不特定多数の人々の話題となり、いつもだれかに注目されている。

イ たくさんの人々から好奇の目で見られ、都合良く利用されている。

ウ いくら仕事をして稼いでも、自分にはわずかなお金しか入ってこない。

エ 精一杯誠意を尽くしているのに、友人たちから相手にされない。

(六) — 線部③ 「カナハギさんを — カナハギさんの精神を — 過大評価していた」とありますが、それはなぜだったの

ですか。その理由を説明した次の文の [1]、[2] にあてはまる表現をそれぞれ答えなさい。ただし [1] は本文中から五字以内で抜き出し、[2] は漢字二字の熟語を自分で考えて答えなさい。

「カナハギさんは、学校や職場でいくら [1] があっても [2] としているから。」

〔問題三〕 次の文章は、前問の本文の続きです。これを読んで後の問いに答えなさい。

「僕」はカナハギさんに言われたとおりに、メディアに登場している姿はおろか、学校ですれちがった時でさえも彼女を見ようとはしなかった。やがてカナハギさんはCMキャラクターにも起用されるような存在となっていた。

二月の空はからからと乾き、頬を切るような風が吹いていた。ビルの間で鳴るのか、多摩川で鳴るのか、ひょうひょうとものすごい音がする。

僕はポケットに手を突っ込んで目を閉じた。カナハギさんの姿がまぶたの裏に浮かぶ。それは今のところ切実なだけけれど、いつしか消えてしまうものであることが直感的にわかった。

空き地に行く頻度は減っていた。それでも日曜日には、ぶらぶらと桜を見にいって見た。この寒さだというのに、花の芽は確実に膨らんでいる。

僕は一度板塀の外に出て、桜のほうを見てみた。枝の先が、かすかに塀の上にのぞく。

今度春が来て、花が咲いた時、この道を通る人たちは瓦礫の中に立った桜の存在に気付くだろう。こんなところに、桜が

咲いていると知ったら、みんなはどうするのだろうか。塀の向こうから花見をするだろうか。板塀を取り払って瓦礫を片付けてしまおうか。それとも――。

いずれにせよ、僕だけの目に触れる桜でなくなるのは確実だった。

その年の桜は遅かった。三月最後の日になっても、まだ三分咲きというところだった。

それでも、板塀の外側から花を確認することはできた。もうそろそろ、近所の人間は桜の存在に気付いていることだろう。僕は中に人が居ないことを確かめてから、穴をくぐるようにしていた。

しかしその日、穴の向こうには人影があった。慌てて突っ込んだ頭を穴から抜こうとすると、向こうから呼び止められた。

「吉谷！」

――嘘。

桜の下に立っていたのは、カナハギさんだった。長い髪が夜風にさらわれて宙に舞う。いつか見た光景とかぶる、と思ったら、中三の春と同じだった。夜で、街灯と月明かりがぼんやりと花の色を浮かせている。カナハギさんの、肌の色も。

その場にかがんだまま、さっと目を逸らした僕に、カナハギさんの声が届いた。

「吉谷、ごめん。もう、『見んな』とか言わないから――」

そっと顔を上げる。カナハギさんがこちらを見て手招きした。

これは都合のいい夢なんだろうか。信じられないまま、僕はふらふらと瓦礫の間をぬって桜の下まで歩いていった。カナハギさんは立つたままじつと僕を見ていた。

僕たちは、桜の下に並ぶ。気付いたら同じタイミングで、花を見上げていた。

枝はもう、頼りなくなかない。少し色の薄い東京の夜空に向かつて、しっかりと伸びて花をつけている。

彼女の横顔に目をやると、照れたように、頬が少し歪んでいた。どこかふてくされたようにも見えるのは、昔の面影を知っている僕だからだろうか。

しばらく無言の時間が続いた。カナハギさんは時々目を動かして、花のひとつひとつや、枝の分かれ目や、背景になったコングリートの山などを見ているようだった。

ふと、幹の途中とちゆうに視線しせんを留めとた。小さく円形に、傷があつた。僕が葉を塗ぬつた場所だ。カナハギさんはそこにそつと触れて言った。

「ごめん」

それからかすかに苦笑いをして付け加える。

「……とかつて、何言つてもムダか。吉谷にほんとにひどいことしたね、アタシ」

こちらに向けられた彼女の目は、今まで見たことのないぬくみのようなものをたたえていた。僕はぼかんとして彼女を見た。

目が合つて、一瞬いっしゆんで感情が弾はじけた。欲望を見抜かれた時の燃えるような恥はずかしさ。放課後に三浦たちとつるみながらこつそりと見ていた時の憧あこがれ。初めて中学の教室で目を合わせた時の確信——さまざまな色をした思いが心の隅すみまで飛び散つて、最後に、この桜を見つけた日の静かな胸の高揚を思い出した。

僕は黙だまつて首を横に振ふつた。

「まだアタシのこと好き？」

「好きだ」

昔したやりとりを繰くり返すと、カナハギさんは声を立ててははつと笑つた。

「じゃあさ、肩車かたぐるましてくれない？」

「は？」

聞き違ちがいかと思つた。しかし彼女は、ポケットに手をつ突おつ込むと、桜の枝を見上げて言った。

「こんなに伸びてさー。もう傍そばで見られないから。ちよつと、押し上げてくんない？」

「いいの？」

僕が訊くと、カナハギさんは「はい、しゃがんでー」と僕の背せ中を押した。素直にかがんだら「あほか！」と昔の調子で怒鳴どなられるんじゃないかとも思つたけれど、言われるままに腰こしを低くした。

「一瞬いっしゆんでいいからさ。あんた長くは保もたなそうだし」

脚あししっかり持つてよ、という声とともに、彼女の腿ももが肩を押した。僕は、胸の前にぶらさがつた脚を、滑すべらないようにしつ

かりとつかむ。

「はい、せーのっ」

というかけ声とともに思い切つて腰を上げた。どっと背骨に負荷がかかる。重つ、と思つたのは束の間で、僕はすぐに桜の甘い香りに胸を満たされていた。きやーつと頭の上で黄色い声上がる。

「近い。すごい」

彼女が花に向かつて手を伸ばしたのがわかった。しやらしやらと夜風に吹かれた花びらが鳴る。

「この桜、多摩川沿いに移植すんだつて。さつき通つた時、近所の人が喋つてるの聞いて……最後に見なきゃつて思つて」
頭上でカナハギさんが話し出した。静かな声だった。

「吉谷に最初にこの桜見せられた時さ、きれいって思つたんだよね。④ こんなきれいな木と、アタシのこと重ねてるなんて、びっくりした……」

僕は彼女の邪魔にならないように、視線だけ上げて花を見た。桜はどうしてこんなにきれいなんだろう。どうして、いつも、こんなにも僕を圧倒してくるんだろう。

「ねえ吉谷」

「うん？」

ありがとう、と耳元で彼女が言った。くすぐたくて危うくバランスを崩すところだったけれど、ぎりぎりですんばつた。僕はこれからも毎年、桜の花を見るだろう。多摩川の河川敷に移植された、ひとときわ若く、小さな傷のある、この木を探しにいくだろう。

花の色があんまりやさしいから、今にも泣いてしまいそうだ。

(豊島ミホ『花が咲く頃いた君と』より)

(七) — 線部④ 「こんなきれいな木と、アタシのこと重ねてゐるなんて、びっくりした……」とありますが、「問題二」、「問題三」の本文には、桜とカナハギさんを重ね合わせて表現している部分がいくつか見られます。それぞれについて並べた次の表に関する設問、問1～問5に答えなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

| | |
|--|--|
| 桜 | カナハギさん |
| <p>〔問1〕</p> <p>真夏に葉がしおれるようなことがあっても、夕立があれば次の日にはあおあおとしていた。</p> | <p>心を傷つけられて、立ち直れないほどのダメージを受けてしまう。</p> <p>元気がなくなるような出来事があっても、どこからか救いの手が差し伸べられて元気を取り戻せた。</p> |
| <p>〔問2〕</p> <p>寒い中でも花の芽は確実に膨らみ、枝の先は塀の上にまで伸びてきていた。</p> | <p>どうしようもない悪い仲間たちの中に加わっていたり、下品で強欲な大人たちの中で毎日を送っている。</p> |
| <p>〔問4〕</p> <p>□、毎年その花で人々を魅了し続ける。</p> | <p>様々な□境にもめげることなく活動を続け、しだいに□角を現すようになった。</p> <p>誰もが知るようなアイドルとして、芸能界で活躍し続ける。</p> |
| <p>花の色があんまりやさしいから、(僕は)今にも泣いてしまいたいそう。</p> | <p>〔問5〕</p> |

問1 表内のこの部分にあてはまる表現を、〔問題二〕の本文中の言葉を用いながら十五字以内で答えなさい。

問2 表内のこの部分にあてはまる表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空き地の瓦礫の中に立っている。
- イ 板塀に取り囲まれている。
- ウ 甘い香りに満たされている。
- エ 街灯と月明かりに照らされている。

問3 表内のⅠ、Ⅱにあてはまる漢字一字を、それぞれ考えて答えなさい。

問4 表内の にあてはまる表現を、本文中の表現を用いながら十五字以内で答えなさい。

問5 「泣いてしまおう」と感じている「僕」は、カナハギさんに対してどのように感じていましたか。本文中の表現を用いながら二十字以内で説明しなさい。